

平成 29 年度卓越大学院トライアル（地域文化研究専攻）
「海外研究拠点ネットワークを使つての院生のグループワークの支援」報告書
メキシコの研究拠点ネットワークを活用した学術交流

青木 義幸（総合文化研究科 地域文化研究専攻 博士課程）

2017 年 11 月 10 日から 20 日の 10 日間にかけて、東京大学卓越大学院トライアル（地域文化研究専攻）及び UTokyo LAINAC の支援を受け、UTokyo LAINAC が主催した海外研究拠点ネットワークに該当するエル・コレヒオ・デ・メヒコ大学院大学（COLMEX）とメキシコ国立自治大学メキシコ（UNAM）との学術交流及び COLMEX の学生とのオアハカ研修に参加した。同グループワーク参加に係る報告書は以下のとおり。

① オアハカ研修（11 月 10 日-13 日）

私の同グループワークへの参加は、メキシコ南部に位置するオアハカでの研修からスタートした。オアハカにおける研修には、東京大学の学生に加え、COLMEX より 3 名の学生が参加した。3 名の COMEX の学生のうち、Diego Emiliano Jaramillo Navarro 氏は、オアハカにおける政治と文化の関係性を研究していたため、オアハカの社会・歴史・文化について詳細な説明を受けることが出来た。Navarro 氏のお陰で我々のオアハカ研修がより実り多きものになったことは疑いようがない。

オアハカは、観光地としても有名だが、それはオアハカでは植民地化が始まる前まで独自の文化が発展し、現在でも同地域では先住民文化が地域内の文化的アイデンティティの重要な一部をなしているためと言われる。しかし、同時に同地域は、2006 年 5 月に始まった教員労組によるストライキに対して催涙弾や警察力が投入されたためオアハカ市民と政府の激しい衝突が発生し、少なくとも 17 名の死者を



オアハカ市の中心部に位置する広場で座り込みを続ける人々

もたらした 2006 年オアハカ抗争の発生した場でもある。言うなれば、オアハカはメキシコの文化的多様性を象徴する場というだけでなく、メキシコ社会における強い社会運動の存在とそれらを抑圧しようとする国家が生み出す社会の亀裂を象徴する空間でもあるのである。

私は、メキシコではなく韓国をフィールドとする地域研究者であり、中でも国家と市民社会が激しくぶつかり合っていた 1980 年代の民主化運動や社会運動を研究している。そのような私にとって、オアハカ抗争の記憶ともいえる市内のあちこちに残されているグラフィティや現在も座り込みを続けている社会運動グループの存在は、韓国の 1980 年代の民主化運動の軌跡と重なり合うものであった。韓国と中南米諸国との比較研究が、両地域における軍事政権下の開発独裁モデルの比較に留まっていることを鑑みると、メキシコと韓国の比較研究、特に社会運動に関する比較研究は韓国研究の新たな方向性の一つではないかと感じた。



COLMEX の学生と訪れた Hierve el Agua にて

② COLMEX・UNAM との学術交流（11月14日-20日）

オアハカ研修終了後、メキシコシティに移動し、Academic Tutoring Sessions、COLMEX・UNAM の学生とのミーティング、ENALLT-UNAM で開催された東アジアに関する会議でのプレゼンテーション等を通じた COLMEX 及び UNAM との学術交流イベントに参加した。本交流の目的は、両大学の研究者のみならず、大学院生との共同研究チームを編成する準備段階として、我々の関心のあるテーマについて知ってもらい、コメント・フィードバックをもらおうと共に共同研究を提案するものであった。

<< Academic Tutoring Sessions >>

Academic Tutoring Sessions では、近年、中南米の労働運動に関する研究を発表している Ilán Bizberg 教授 (COLMEX) と、労働運動と国家の関係性について議論することができた。まず、当方から、韓国のケー

スについて、政権によってスタンスは異なるものの国家が労働運動に対して強く関与する傾向があるが、国家による介入に批判的な民主化運動世代が多く労働運動に関与しているため、韓国の労働運動は国家の介入と激しく対立する傾向がある点をお伝えした。一方で、Bizberg 教授は、メキシコにおける労働運動に対する国家の関与は、警察力等を用いた抑圧を通じたものよりも、制度等を通じて管理する傾向が強くなっており、そのひとつの要因としてメキシコの労組が企業別労組となっていることを指摘していた。この議論を通じて、メキシコと韓国は、表面上は植民地支配、開発独裁、民主化という類似した社会変化があったものの、労働運動の展開には大きな違いがあり、これは労働運動の組織や人々の労働運動に対する認識等に基づくのではないかと共通理解を得ることができた。

<< ENALLT-UNAM Conference on "Temas contemporáneas de Asia Este" >>

ENALLT-UNAM で開催された東アジアに関する会議では、瀬地山角教授（東京大学）のキーノートスピーチ（「Female and Senior Labor in East Asia」）、具裕珍氏による日本の保守運動に関する報告（「The rise of conservative movements in a globalizing civil society」）に続き、韓国の社会運動について「Korea as "Movement Society" - Three elements of movement society -」とのタイトルで報告を行った。私の報告に対しては、韓国とメキシコの世界運動の経験には類似している点が多く見られるため、比較研究をしてみたら面白いのではないかと建設的なアドバイスも頂く事ができた。他方で、当日頂いた質問のうち、特に興味深かったのは、UNAM の学生（Marisol Lambarri 氏）から 1970 年代以降の韓国民衆運動内部において女性がどのように認識されていたのかといった非常に地域研究的な質問があったことであった。

Lambarri 氏の関心事項は、金大中政権下において設立された女性の地位向上等に関する女性政策を担う行政機関である女性部という組織が、女性問題を正面から扱えなかったのは同機関の設立が女性運動の結果ではなく男性を中心とした民主化運動の帰結であったからではないかという仮説に基づくものであった。このような既存の運動組織に対する Lambarri 氏の解釈は、現在韓国で進んでいる民主化運動内部の男性中心主義に対する批判等の運動の捉え直しの動きに添ったものであり、今後の研究成果が期待される。但し、Lambarri 氏によると、UNAM には韓国の社会運動研究を進めるための韓国の社会運動関連資料へのアクセス方法や奨学金を得られる韓国の研究機関に関する情報が殆ど無いため、研究に非常に苦労



ENALLT-UNAM で開催された会議での報告

しているとのことであった。こういった史料や研究機関に関する情報については、日本の研究機関は比較的情報のストックが多くあるため、これらの情報をスペイン語で発信していくことも、今後、東京大学と UNAM との学術交流の一助になり得ると考えられる。

<< Utokyo-COLMEX Student Meetings >>

COLMEX で実施された学生とのミーティングでは、日韓の芸術行政におけるジェンダーバランスの問題や沖縄における太陽暦の導入と植民地支配の関係等、間接・直接的に韓国と関連するテーマを研究している学生と意見交換をすることができた。これらの学生が共通して苦労していたのは、日本が保有している一次史料へのアクセス方法を学ぶ機会がないという事であった。今後、東京大学を訪問する学生には、一次史料へのアクセス方法を学ぶワークショップを開催することが望ましいのではないかと感じた。

また、COLMEX でのミーティングでは、メキシコのオンラインを通じた社会運動を研究している Antony Flores Mérida 氏とも交流を行い、2018 年に東京大学主催により日本（日光）で開催予定の「2018 チリ・メキシコ・日本フォーラム」に向けた社会運動に関する共同研究を提案した。Mérida 氏は、日本への訪問や共同研究に強い関心を示しつつも、資金面の問題をどのように解決するかがネックだと考えている様子であった。今後、学生間でグループワークを実施し、共同研究の成果を発表するためには、資金の問題をクリアすることが最大の難関になると見られる。



COLMEX で実施された学生とのミーティング